熊本洋学校とジェーンズ、熊本バンド（上）

藤本　誠

一　熊本洋学校の開校

一八六八年、明治改元前の慶応四年四月に肥後藩庁は藩営洋学所を開設し、肥後藩の洋学教育が正式に緒に就いた。しかし、洋学とは名目ばかりで、従来の漢学中心の授業で内実を伴わないものであった。そのため、実学党が実権を握り肥後の維新を迎えた一八七〇（明治三）年七月八日、藩校廃止令によって、藩校の時習館[1]や藩の医学所・再春館[2]などとともに閉鎖された。[3]小楠の思想を継承し、実学教育を本格的に実践することを企図したものであった。

同年八月、新たな洋学校創設の要務を帯びて、野々口又三郎（為志）が長崎に出張した。アメリカに渡航して三年後の一八六九（明治二）年、結核で肺を病み思うような成果が得られぬまま帰国していた横井大平は、長崎で療養を続けていた。早期の洋学学習の必要性を痛感していた大平は、小楠門弟で親友の野々口為志に、外国人教師による本格的な洋学校の設立を力説。その後、大平と野々口は相携えて帰熊し、小参事・山田武甫（たけとし）や大参事・長岡護美（もりよし）に訴え、藩知事・細川護久（もりひさ）にも熊本藩に開明的洋学教育が必要なことを進言した。薩長土肥による藩閥政府が中央政権を牛耳り、小楠亡き熊本藩は完璧に後塵を拝する様相を呈していた。また、藩内には時習館派・学校党の神風連による不穏な動きもあり、早急に実学派の主張を洋学校に結実させ、熊本藩の維新の権勢を顕す必要があった。[4]

洋学校設立に先立って、一八七〇（明治三）年一〇月、熊本藩最初の西洋医学校として古城（ふるしろ）医学校が熊本城出丸古城（ふるしろ）（現・県立第一高等学校敷地）に創設された。熊本洋学校に隣接した場所で、病院を併設していた。寺倉秋堤（しゅうてい）や小楠の弟子・内藤泰吉（たいきち）が中心

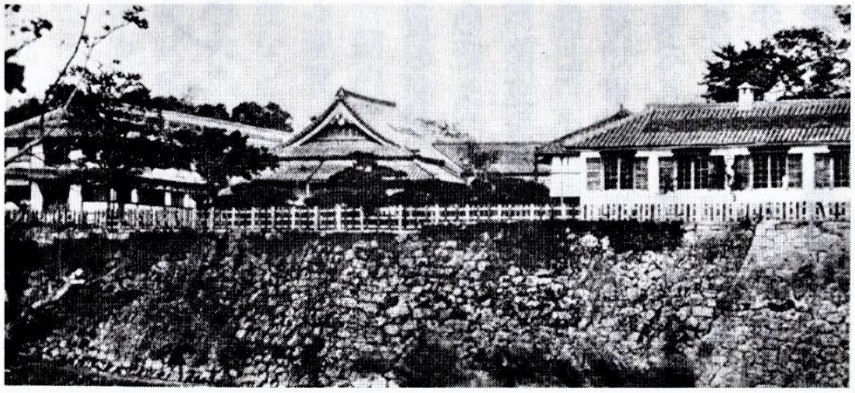
となり、翌年一月にオランダ軍医マンスフェルトを教師兼医師として招聘し、七月には廃藩置県によって官立の古城医学校兼病院となった。幹事や教師のほとんどが小楠の門弟たちで占められ、実学党主導の下で開明的教育改革が推進された。

古城医学校が創設された明治三年一一月、熊本藩は新たに開設する洋学所の設立趣意、規則書を制定し、入学志願者募集を発表した。幹事に野々口為志を充て、竹崎茶堂[5]の宰配下に置かれることになった。横井大平の進言を採り入れ、教師に外国人を招き、洋学を志す士民秀才を選んで有為の人材を育てるという実学派の主張が具現化されたものであった。

横井大平は、アメリカから外国人教師を得るため病を押して上京し、フルベッキ[6]を訪ねた。東京帝国大学創設のため、長崎から転じて太政官顧問になっていたフルベッキに、御雇い外国人教師の人選を依頼しに行ったのである。細川護久知事の意向もあり教養ある退役軍人を依頼し、フルベッキはニューヨークの改革派教会の伝道局に照会して、最終的にL・L・ジェーンズが来日し任に就くことになった。

古城（熊本市古城町）での洋学校の準備が整い、大平は熊本城内の一室に住み込み尽力していたが、病気が悪化。一八七一（明治四）年四月三日に熊本洋学校の開校を待たずして亡くなった。弱冠二二歳であった。兄の左平太も帰国後、同じ結核で没している。[7]

キャプテン（大尉）ジェーンズが来熊したのは、大平が亡くなって四ヵ月後の明治四年八月一五日のことであった。洋学校は「熊本洋学校」と改称され、九月一日に開校された。一学年の定員五〇人に第一回生として入学したのは四六人で、四年制の課程が始まった。[8]第一回生の小崎弘道によれば、「洋学校の生徒は、藩中は勿論農工商の子弟にても学力優秀の者を募集して入学試験を行ふたが、応募者は四五百人に達し、其中及第したのは五十人であった。学資は一切校費で、書籍文房具より食料に至る迄悉く支給されたから非常に便宜を得た」[9]という。



古城の熊本洋学校（熊本県立第一高等学校敷地）

二　ジェーンズの教育理念

ジェーンズの教育構想は、ジェーンズが私淑し尊敬していた英国ラグビー・スクールの校長トマス・アーノルド(Thomas Arnold)にならったものであった。[10]その学風は、「従来のパブリック・スクールの知識の偏重に反対して、宗教的道徳的原理、紳士的行為、知的能力の三大方針をたて、徳育を首位に、知育を次位におき、徳育と知育との一般的結合を意図し」[11]たものであった。「その徳育を主とし、いわゆる自学自習の教育をモットーとして、人格の教育に重きを置き、生徒をことごとく寄宿舎に入れて、校長や教師は舎監となって、寝食を共にし、全二四時間の全人格教育を標榜する教育、しかして教師の生活が生徒にそのまま照射し、その薫陶によって、人格の形成を所期する英国のラグビー・スクールの教育信条が、洋学校に実施せられ」[11]、「知識修得の教育課程の厳密な組み方よりも、むしろ、教科を修得してゆく努力や、その成果とともに生徒個人の品性の陶冶に重心を置くもの」[11]となった。

L.L. ジェーンズ（Wikipedia より）

全寮制による全人格教育は、ジェーンズの母校ウェスト・ポイント陸軍士官学校の教育法にならって行なわれた。教科書は英語の原書を使用し、授業はすべて通訳を用いず、英語でジェーンズ自ら行なった。小崎弘道は次のように回顧している。

「洋学校の監事は野々口為志氏であつたが、彼は学生の教育は勿論学校の経営をも全然ヂエーンスに一任したので、ヂエーンスは先づ読本、数学、地理、歴史、物理、化学、地質、天文の諸科学を設け、修業年限を四箇年とし、生徒は悉く寄宿舎に収容して特種の訓練を施す事と為し、授業上のことは勿論生徒の監督に至る迄一切を彼一人にて担当し、彼より前に傭入れたる数学、訳読其他の教師を悉く解傭して、単身にて学科の全部を受持ち、年中朝八時登校し午後四時迄教授に当つた。最初の一年は一級だけであつたから其仕事も容易であつたが、二年

三年を経過して級数が増加するに及びては上級生中成績の優秀なる者を抜擢して教師と為し、彼自ら之を監督した」[12]

小崎の回顧にもあるように熊本洋学校では、成績優秀な先輩が後輩の学習を指導し、自らの学習効果も向上させるといった自助の教育が行なわれていた。封建制が長い間続き、「個人の尊厳、進歩や自由平等の概念といったものが抑圧されており、文明は育たず、物心両面で大変貧困な状態」[13]に置かれていた日本の肥後藩で開明的な教育を施すために、ジェーンズは自助の教育を採り入れた。ジェーンズは、こう記している。

「〈私はひそかに、この学校は当初から自助の原則―天は自ら助くる者を助く―に従おうと決意した。つまり、しっかり学んだ事は教えることができるというもう一つの原則を実際に適用しようと決心したのであった〉

結局、学校を運営していくうえで欠かすことのできない助手の役目を、ほかならぬ生徒自身に務めさせようとしたのだ。はじめに私が生徒に教える、つぎにそれを生徒が相互に教え合う、というわけである。このように、学んだ事を次に教えるという経験は、生徒には貴重な経験になったことと思う。というのは、教えることこそ、もっともよく学ぶことだからだ。

そのほか自助の精神にのっとって、日常生活のさまざまな場面で、できる限り自分のことは自分でやるという方針を貫こうとした。（中略）

これがいかに困難なことであったかは前述のとおりである。だが私は生徒相互の間に、学習や指導能力について必要な競争心をかきたてることにより、この問題を解決していった。新しく学習した事項を他人に説明し教授できることだけが、それを完全に習得したことの唯一の証明だという原則を生徒に十分に納得させ、それを実行させた。その達成の状況に応じて生徒間の序列を修正し、それを席順などに反映させた」[14]

この自助の精神は、一八五八年に刊行されたサミュエル・スマイルズの『SELF-HELP』（『自助論』）[15]に拠っているのは間違いないであろう。ひとたび刊行されるや空前の売れ行きで世界各国語に訳され世界的なベストセラーとなった本で、イギリスのブルジョア的勤勉立志を説き、「天は自ら助くる者を助く」（Heaven helps those who help themselves.）でつとに知られている。

豪放闊達なジェーンズは、洋学校の俊英たちに対し厳格な指導を通して自助の精神を徹底した。その徹底ぶりは徳富猪一郎（蘇峰）とて例外視されず、一回生として入学したものの年齢が不足し学業に見込みなしとして一旦退校させられ、四年後の一八七五（明治八）年に一四歳で五回生として再入学している。[16] 一回生の入学生四六人のうち卒業したのは一一人、二回生は入学生七二人のうち卒業したのは同じく一一人であった。二〇人が入学した五回生の同期には、猪一郎と同い年の原田助（後・同志社社長、ハワイ大学教授）や蔵原惟郭（これひろ）（後・熊本英学校長、熊本女学校長）、および数え年弱冠一〇歳の遠山参良（後・五高教授、九州学院初代院長）がいた。

こうした熊本洋学校の教育理念は、九州学院の建学の精神にも通じるものがある。初代院長・遠山参良の熊本洋学校での学びは一年間であったが、その後、熊本バンドの英傑たちに引き連れられ同志社英学校で学び、さらに熊本洋学校の教育理念を引き継ぐ広取（こうしゅ）学校でも学んでいる。遠山参良は多感な少年期にキリスト教主義人格教育の影響を受け、その精神を根付かせたに違いない。

また、ジェーンズは英語演説を学生に課した。当時の日本で演説を課すのは慶応義塾（一八六八《慶応四》年～）と熊本洋学校（一八七一《明治四》年～一八七六《明治九》年）だけであったが、慶応義塾では福沢諭吉が日本語で演説を学生に課していたのに対し、熊本洋学校では英語の演説であった。英米大家の演説や文章を暗誦し、精神修養を行なったのであった。[17]

特筆すべきは熊本で最初の男女共学を実現したことである。入学した二人はジェーンズ夫人のもとで英語を学んでいた横井みや（横井小楠の一女、海老名弾正夫人）と徳富初子（徳富一敬の娘、蘇峰・蘆花兄弟の姉、湯浅治郎夫人、同志社及び国際基督教大学総長・湯浅八郎の母）であった。海老名喜三郎（弾正）など男子生徒の反対があったが、[18] ジェーンズは男尊女卑の非を諭し、自分の意向を通した。[19] 席を並べて学ぶことを拒まれた横井みやは、後に拒んだ当人・海老名弾正の夫人となった。正に奇縁と言う外ない。

その他にジェーンズは、米・絹・茶などの集中生産方式の指導を行ない、講義録『生産初歩』[20]を残し、以後の熊本の殖産興業に多大な影響を与えた。また、ジェーンズが輸入した印刷機の払い下げによって、一八七四（明治七）年、熊本で最初の新聞『白川新聞』が創刊された。

三　ジェーンズとキリスト教信仰

『九州文学』第三一号[10]付録の下村孝太郎談話「信

教の事に関して」によると、ジェーンズは熊本洋学校の教師としてキリスト教について少しも口にしなかったという。

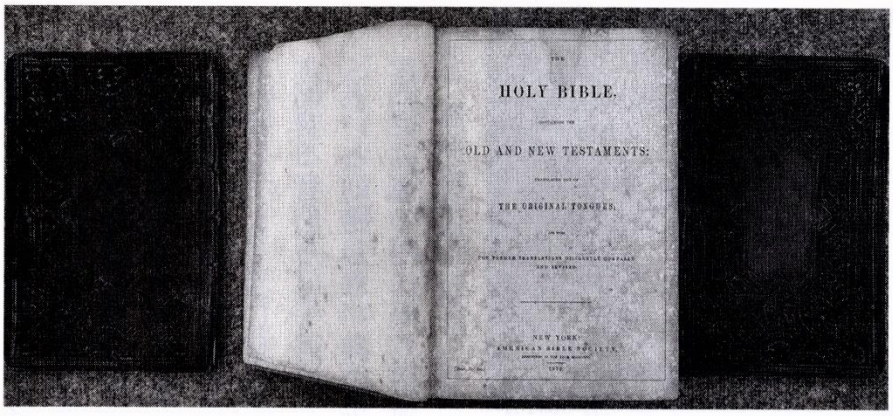
「初め『キヤプチン』、ヂエンス氏の熊本藩に聘せられて洋学校の教授となるや、教法上に就ては毫も是を口にせざるのみならず、氏が朝夕の挙動に於て異あるを見。且つ氏は気格、磊落闊達の質なりければ宗教など奉ずる人なる可しとは露程も想ひ及はざりしなり、氏が後に至て傳教するに至りしは、時機の熟するを窺ひて此に出でしか、果た中途にして偶然思ひ立ちしや知る可らず、氏は洋学校を去る前年の冬に至り聖書（勿論英語聖書にして、四福音書を別々にしたる小本）を生徒に配布し、自宅にて会読を初めたり、余も一友に誘はれければ其の会の如何なることを講究するやと問ひしに、一友答ふらく『其の会は切支丹宗を修むる為めなり、始めに先生が「オ、ロルド、オ、ロルド」と唱へて会を始む、兎も角英語講習の為ともなれば来らずや』と」誘われて、下村孝太郎はジェーンズの聖書購読会に参加したのであった。

熊本地震前のジェーンズ邸
（水前寺公園：Wikipediaより）

事情は金森通倫（みちとも）の場合も同様であった。明治二二年、京都・同志社で開会された第一回夏期学校での回顧談[21]の中で、次のように述べている。

「明治七年一月頃ナリシカ氏始テ今ヨリ聖書ヲ教ユル故我家ニ来レヨト告ゲラレタリ　固ヨリ我等ハ聖書ハ恐シケレド先生ヲ信ジテ行キタリ　既ニ行クヤ此語彼句ヲ記憶スベシト云ヒシガ故ニ又タ先生ヲ信ジテ其言ノ如クセリ　約翰（ヨハネ）傳三章ニコデモノ話ノ如キハ当時能ク記憶シタリ　明治八年四月春ノ頃門弟中少シ心ノ動キ始メタルモノアリ　先生聖書ヲ読ミ又タ我等ト祈禱ヲナスニ其祈禱ヤ随分長ケレバ我等中途目ヲ挙ゲ之ヲ視ルニ両眼閉ヂ其周辺赤紅ヲ呈セリ　我等之ヲ視テ可笑シクシテ只微笑スル耳（のみ）　然ルニ先生ノ両眼ハ落涙潸然　是実ニ吾人ヲ愛スルノ熱涙ニテアリシナリ　吾等之ヲ見テ『西洋人モ亦泣ヲナス乎』ト笑ヘリ　而シテ先生ハ尚ホ未ダ基督教ヲ信仰セヨトハ云ハザルナリ」

金森が回顧しているように、ジェーンズの聖書勉強会は明治七年から始まった。前年、切支丹邪宗門禁制の高札が撤去されたばかりで、熊本ではまだ排耶蘇の風潮が根強く残っていた。参加した生徒達の思いは様々であったが、ジェーンズは事前に準備しておいた英語の分冊聖書や旧新約聖書を出席した者達に与えた。毎週土曜日に出席者はそれぞれ与えられた聖書を携え、ジェーンズの家に集まった。



ジェーンズから授与された聖書（九州学院所蔵）

ジェーンズは宣教師でも伝道者でもなかった。オハイオ州ニューフィラデルフィアの敬虔なクリスチャンの家庭に生まれ育った典型的な一九世紀アメリカ人であった。[22] もとより特定のキリスト教教派の宣教ミッションをもった教師ではない。しかし、ジェーンズ自らの授業を通して、西欧文明の根幹にあるキリスト教が、儒教主義や儒教的教養に立脚していた生徒達に伝えられていった。小崎弘道は次のように回顧している。[23]

「ヂエーンスは始めの間は生徒に対して一言も基督教の事を語らなかった。三年を経て生徒が稍（やや）英語を解し得る頃、一日理科の時間殊に天文学を教授する際、宇宙の洪大無辺なる事や秩序整然たる事を説き示して、此天地は偶然に斯く成立した

ジェーンズが福島綱雄（熊本洋学校第３期生）に与えた聖書

【表紙裏・表題】

THE
HOLY BIBLE,
CONTAINING THE
OLD AND NEW TESTAMENTS:
TRANSLATED OUR OF
THE ORIGINAL TONGUES:
AND WITH
THE FORMER TRANSLATIONS DILIGENTLY COMPARED
AND REVISED

NEW YORK:
AMERICAN BIBLE SOCIETY,
INSTITUTED IN THE YEAR MDCCCXVI.
1872.

【裏見返し】

I was given the Book from
our teacher in 1874 september
in some night.

T. Fukusima

【表紙】１８７２年（明治５年）ニューヨーク・アメリカ聖書協会　刊行
【裏見返し】１８７４年（明治７年）９月のある夜、私たちの先生（L. L. ジェーンズ）から聖書を与えられた。
T. 福島
※刊行されたばかりの『THE HOLY BIBLE』（聖書）がアメリカから取り寄せられ、熊本洋学校２年生だった福島綱雄（第３期生）に贈与された。革製のハードカバーは、布製ハードカバーに製丁し直されている。

ジェーンズが福島綱雄（熊本洋学校第３回生）に与えた聖書の説明パネル（九州学院所蔵）

物であろうか、何者か之を主宰する者があるのではなからうかと云ふ如き質問を起し、天地の神秘を以て有神の信仰の自然なる事を語り、又或時は歴史や英文学を教ゆるに当り、欧米文明の基礎は基督教の信念にある事を述べて聖書を理解するの必要を示し、若し有志の生徒にて聖書を学ばんと欲する者あらば一週に一夜自宅にて之を教へてもよいと勧誘した。其結果毎水曜日の夜三四十名の生徒は彼の宅に集り聖書を学ぶ事となつた」

熊本洋学校の生徒たち（1875年：Wikipediaより）

ジェーンズの教育を通した「人間的な精神の解放というものが、真の宗教への関心へとつながって」[24]いき、生徒の中に「低俗な迷信や、根拠のない超自然的な信仰から自らを解放し、真の宗教を求めて」[24]いく者達が出てきた。その中の一人、市原盛宏[25]が、「生きる意欲を奮いたたせてくれる」、「多くのキリスト教の中の最良のキリスト教」[24]について教えを請うたのに対し、他の、山崎、金森、下村、伊勢、宮川、海老名、不破、浮田[25]ともども前にし、ジェーンズは「それは〝キリストのキリスト教〟です」[24]と答えた。ジェーンズには、「〝理性と人間性に導かれたキリスト教でなければならない〟」[24]という信念があり、「健全で調和のある人間精神の発達に役だつような、そういうキリスト教でなければいけない」[26]という思いがあった。「人が人類のために献身している姿こそ、まさにそれが神の意志の表れである」[26]という確信のもと、ジェーンズは聖書講義で「イエスによって述べられた真実」[26]を追求し、「ヒューマニズムの精神を胸の奥深く保ち、人類の最大限の福祉のために献身すること」[26]がいかに大切かを説いた。そして、「独断や偏見にまどわされず、正しく歴史の中に位置づけてみると、キリストとその言葉は超自然的なのろいではなくなり、生きる力、正義と啓蒙への熱意を鼓舞する力に」[26]なることを力説したのである。

（ふじもと　まこと／九州学院一〇〇周年記念歴史資料・情報センター長）

【注】

（1）細川藩八代藩主・重賢（しげかた）が熊本城内二の丸に文武の講

習所として、一七五五（宝暦五）年に設立した藩校で、学風は朱子学によって貫かれた（熊本縣教育會編『熊本縣教育史・上巻』昭和六年一一月一〇日発行、第二章より）。

（2）藩医・村井見朴（ぼく）が一七五七（宝暦七）年に開校した、細川重賢藩政時代からの医育機関（『熊本縣教育史・上巻』同前より）。

（3）同志社大学人文科学研究所編『熊本バンド研究　日本プロテスタンティズムの一源流と展開』（昭和四〇年八月一五日発行、みすず書房）所収の杉井六郎『熊本洋学校―実学党の理想教育機関―』の七〇～七三頁。

（4）『近代日本の青年群像　熊本バンド物語』（竹中正夫編、三井久著、一九八〇年六月三〇日発行、日本ＹＭＣＡ同盟出版部）三六～四〇頁。

（5）実学派豪農で横井小楠の高弟。矢嶋順子と結婚し、実学党政権の民生局大属に登用され藩政改革の主導者となった。古城医学校、熊本洋学校の創設に尽力し、本山村に日新堂を興した。

（6）Guido Herman Fridolin Verbeck（一八三〇～一八九八）アメリカのオランダ改革派教会派遣の宣教師。一八五九（安政六）年、海外伝道局宣教師として、ブラウン、シモンズと共にニューヨークを出発し、長崎に到着。その後、幕府の英語所（長崎語学所、後の済美館）の教頭に就任。この英語所で、横井左平太・大平はフルベッキの教えを受けた。また、一八六六（慶応二）年に開設された佐賀藩の致遠館にも招かれた。語学（英・仏・蘭・独）のほか諸学を教授し、特に新約聖書とアメリカ憲法に重点を置いて教育した。その門下からは、大隈重信、副島種臣、江藤新平、伊藤博文、大久保利通ら多くの指導者が輩出された。一八六九（明治二）年、東京に招聘され開成学校教師となり、最高立法機関である公議所にも列席した。この時、横井大平が、御雇い外国人教師の人選を依頼に来たのである。七三（明治六）年から五年間、正院翻訳局で法典の翻訳・調査に専念。七七（明治一〇）年には勲三等旭日章を授かった。翌年、アメリカへ一時帰国したが、再来日し、改革派の宣教師に復帰した。築地居留地に設立された一致神学校の講師、理事員となり、八一（明治一五）年から八七（明治二〇）年まで聖書翻訳委員としてヘボン、植村正久らとともに詩篇を翻訳。八七（明治二〇）年、明治学院の設立に際して理事、教授に就任。九一（明治二四）年、無国籍だったフルベッキに対し明治政府から特別に日本永住権が与えられた。この頃、鈴木（山内）直丸（後、日本福音ルーテル熊本教会初代牧師）が明治学院神学部で学んでいたのである。その後、明治学院を辞し、流暢な日本語で説教して諸教会を助けた。九八（明治三一）年三月に東京で亡くなり、大隈重信・副島種臣らによって青山墓地に墓が建てられ

た（キリスト教学校教育同盟編『日本キリスト教教育史　人物篇』昭和五二年三月二〇日発行、創文社、一〇八～一一〇頁、および『別冊歴史読本・日本「キリスト教」総覧』一九九六年一月九日発行、新人物往来社、一四八～一四九頁。詳細な内容については、佐波亘『植村正久と其の時代　第一巻』・「二〇　フルベッキ博士」を参照）。

（7）『近代日本の青年群像　熊本バンド物語』（同前）四三頁。

（8）同右書八二頁に、「第一回生　入学生四六人　卒業生一一人、第二回生　入学生七二人　卒業生一一人、第三回生　入学生四〇人　卒業生ナシ、第四回生　入学生三、四〇人　卒業生ナシ」とある。九州学院初代院長・遠山参良が在籍した第五回生は、一年在学して翌年の一八七六（明治九）年には学校が閉鎖された。

（9）小崎弘道『七十年の回顧』・「第一章　幼年時代・四洋学校時代」より（『小崎全集』第三巻自叙伝、昭和一三年一一月一〇日発行、警醒社）。

（10）『九州文学』第三一号付録（明治二六年一月三〇日発刊、九州文学社、熊本英学校内）所収の森田久万人（くまんど）「ヂエンス先生ニ就テノ回想」に、「師ガ平素門人等ニ談話セラレシ人物ノヒトリハ、彼ノ有名ナル英國ノログビー中学校々長タリシ、トマス・アルノルドノ事ナリキ、是レヨリ、師ノ教育ノ目的ヲ推測スルニ、全ク書生各自ノ品性ヲ修養スルコトニテアリシ、故ニタトヒ、数十巻ノ読書ヲ為スモノアリシモ、取テ之ヲ奨マサズ、亦諸学科ノ奥義ニ功者アルモノアリシモ、殊ニ之レヲ尊シトセズ、然レドモ、若シ智情意三性ノ健全ニシテ、円満ナル発達ヲ遂ゲツツアルモノヲ見テハ、太タシク、之レヲ賞嘆セラレタリ」と回想されている（『熊本展望』一九七六年冬季号・第五号所収の〈資料篇〉より）。

（11）（3）（『熊本バンド研究』）の一一四頁。

（12）（9）と同じ。学科目については、卒業生の卒業証書（第一回生余田司馬人（よでんしまと）の免状）が残っており、そこに教科課程が記されている。第一頁にジェーンズの自筆の英文、第二頁に訳文と白川県（注・当時の熊本は白川県と八代県に分かれていた）の証明が添付されている（〈3〉の一三四～一三六頁）。教科課程は次の通り。

「第一　語学　読方　習字　文典　作文　英語　文学
第二　胸算　算術　第三　地理書　第四　万国歴史
第五　代数学　第六　幾何学　測量術　第七　窮理学
第八　化学書　第九　星学書　第十　地質学　第十一
人体書」

（13）ジェーンズ著・田中啓介訳『ジェーンス　熊本回想』（昭和五三年一二月二〇日発行、熊本日日新聞社）「熊本洋学校・〝自助教育〟の原則」の三八頁。

（14）同右書の三九～四一頁。

（15）『SELF-HELP』は日本では、中村正直（号・敬宇、儒者、

明六社員、メソジスト受洗）によって明治四年七月に『西国立志編』（原名『自助論』）として訳出出版されると、「明治の聖書」と言われ、青少年に計り知れない影響を与えた。

(16) 徳富猪一郎『蘇峰自伝』（一九三五年発行、中央公論社）の「熊本洋学校入学と退校」に「先輩のある者は、予に向って、徳富先生の子ともいわれる者が、さほど覚えが鈍くては怪しからんなどとて、ほとんど予の頭を殴らんばかりに叱り付けた事もあった。その時分から我々と同時に入校したる新入生は、見込みなしとて退校を命ぜられた者が、ほとんど過半であった。（中略）されば予は今後いかなる事があっても、再び洋学校には足を向けまいという決心をした」と、猪一郎は回想している。

(17)『近代日本の青年群像　熊本バンド物語』七九～八〇頁、および日本組合熊本基督教会（現・熊本草葉町教会）発行『ともしび』の海老名弾正「思出を語る」（昭和一〇年七月発行、第六三号、『熊本展望』第五号収録〈資料篇〉八八頁）より。

(18) 渡瀬常吉『海老名弾正先生』（昭和一三年一二月二五日発行、龍吟社）の「第七章ヂエーンスと熊本バンド・八　興味ある先生の失策」に弾正の夫人・宮子未亡人の手記として、次のように記されている。

「先生のこれ丈けの注意があるに係らず、何んだ女を男学校で学ばせるとは怪しからんとの議論が、上級生の中に沸騰したのです。それでもヂエーンス先生を恐れて抗議を申込に行かうと言ふ人は一人もない。其の時に『僕が先生の所へ行つて言はう』と奮然として起つたのが海老名です。直にヂエーンス先生に面会して、『先生女を男生徒と一所に学ばせると云ふことは怪しからんではありませんか』と非常な勢ひを以て申しました。すると先生は目をまん丸くしてじつと海老名の顔を見すへて『お前のお母さんは男か女か』これが先生の第一の答で又問ひであつたのです。これに答へて『女でございます』と言ふ外はありません。そこで先生は諄々としてお前が何も分からない赤子の時に汚物にまみれた體を汚いとも思はず、洗ひ清め、空腹に乳を與へたものは誰れであるか。子供の折に苦しみを訴へた時に労はり慰めてくれたものは誰れであるか。子の為めに労を労とせず育て上げて今日に至らしめたものは母ではないか。其の母たる女に対して軽蔑の言をはくとは怪しからんことであると散々に叱られ一言の返すべき言葉もなく引下つたが、あんな苦しいことはなかつた。さうして以来は女の味方となることが出来た、又男女共学の考へも其所に根ざして居る、とは折り折りに

興に乗じての主人自らの話でございます。今より五十年の昔あの九州の一地方に於てヂエーンス先生から斯う云ふ教訓を受けた青年達があつたと言ふことは、思ふと不思議な感じがいたします。ここには大なる摂理の存することを思はずには居られません。」

(19)『近代日本の青年群像　熊本バンド物語』・「女子教育の先鞭」九〇～九四頁、および『熊本英学史』(田中啓介編、昭和六〇年九月二五日発行)一〇六～一〇七頁。

(20)ジェーンズが英文で執筆し、洋学校の英語テキストとして使用。それを洋学校生徒の山崎為徳・松村元兒・市原武正が集訳し、明治六年夏に上梓したもの。『熊本展望』(特集　熊本バンド、一九七六年冬季号・第五号)の〈資料篇〉に全文掲載されている。『新熊本市史　史料編　第六巻　近代Ⅰ』(平成九年三月三〇日発行、新熊本市史編纂委員会)にも新たに活字化され収録されている。また、国立国会図書館の近代デジタルライブラリーでも初版本が全文公開されており、閲覧できる。

(21)「明治二十二年七月・文学会雑報」(佐波亘『植村正久と其の時代　第一巻』一九三七年一二月一〇日発行、教文館)五一七頁より。

(22)『熊本英学史』・田中啓介「第二部熊本洋学校」八九～九〇頁。

(23)(9)の第一章・「六、基督教の研究」一四頁。

(24)(13)の「熊本バンド・キリスト教への関心」一一五～一一七頁より。

(25)市原盛宏＝第二回生、同志社教授、横浜市長、朝鮮銀行総裁。山崎＝山崎為徳、第一回生、岩手県水沢出身、同志社教授。金森＝金森通倫、第二回生、同志社教授、同志社社長代行、牧師。下村＝下村孝太郎、第二回生、同志社社長、工学博士。伊勢＝横井時雄、第一回生、横井小楠の長男、同志社社長、牧師、代議士、東京日日新聞主幹。宮川＝宮川経輝、第二回生、同志社女学校教師、牧師、組合教会三元老の一人。海老名＝海老名喜三郎(弾正)、第二回生、熊本英学校長、同志社学長・総長、組合教会三元老の一人。不破＝不破唯次郎、第二回生、牧師。浮田＝浮田和民、第一回生、同志社・早稲田大学教授、法学博士、月刊『太陽』主幹(『熊本英学史』前出・一一七～一一九頁、『近代日本の青年群像　熊本バンド物語』前出・一五二～一五八頁、その他参照)。

(26)(13)の「熊本バンド・聖書講義」一一八～一二一頁より。

※特に『ジェーンズ物語』(前ジェーンズ邸館長・黒田孔太郎著、平成二六年～二九年)を参照させていただきました。